大学生の不登校，退学理由に 友人間のソーシャル・サポートが与える影響

池田 満¹

(¹ 国際基督教大学 教育研究所)

キーワード：大学生の退学，ソーシャル・サポート，対人関係

The Effect of Social Support among Friends on the Reasons for College Truancy and Dropout

Mitsuru IKEDA¹

(¹ Institute of Educational Research and Services, International Christian University)

Key Words: college dropout, social support, interpersonal relationship

目 的

近年，大学生の不登校や退学のケースが増加しており，大学生生活への適応を促進し，不登校，退学を予防するための介入へのニーズが高まっている。大学生の大学への適応を予測する要因として，一般に学習面での問題（学習技術や学習に対する動機やレディネスなどの不足）と対人関係上の問題が注目されている（谷島，2005 など）。このことから池田（2011）は大学生の退学，不登校予防への示唆として，大学生に対して対人関係能力を向上させ，大学内でのソーシャル・サポート・ネットワークづくりを促進するための組織的取り組みの必要性を述べている。

一方，牧野（2001）が大学生を対象に行った調査から，不登校や退学の理由として実際に重視されたものは，大学への不満と，無気力感であり，対人関係や学習面での困難は重要ではないことを明らかにしている。つまり対人関係上の適応（不適応）は不登校や退学という行動に直接的影響を与えるものではなく，大学への不満を持っていたり，無気力状態にある学生が不登校・退学を選択することを予防（助長する）上での，媒介要因であることが推測される。

そこで本研究では，ソーシャル・サポート促進が大学生の不登校，退学を予防する過程について，より詳細な検討を行うことを目的とする。

方 法

回答者と調査方法 首都圏の私立大学で心理学関連の講義を受講している大学生を対象に質問紙調査を実施し，107 名（男性 64 名：59.8%；女性 41 名：38.3%；無回答 2 名：1.9%）から回答が得られた。回答者の平均年齢は 20.0 歳（SD = 1.16）であった。

尺度 ソーシャル・サポート：福岡（2007）が作成した 10 項目のサポート内容を提供する友人の存在について「全くない」から「確かにいる」まで 4 件法で回答を求めた。

不登校傾向・退学希望：牧野（2001）が使用した尺度を用い，「大学に行きたくない（不登校傾向）」，「大学を辞めたい（退学希望）」と感じた頻度それぞれについて，「全くない」から「頻繁にある」まで 4 件法で回答を求めた。また不登校傾向，退学希望ともに「全くない」以外の回答をした者に対して，引き続きその理由を，「大学への不満」と「無気力」の 2 因子からなる尺度（牧野，2001）を用いて，「当てはまる」から「当てはまらない」までの 4 件法で回答を求めた。理由については不登校傾向，退学希望ともに構成されている。

一般的適応：学業を含めた適応感を測定することを目的として，生活満足度尺度（吉武，2010）を用い，「当てはまる」から「当てはまらない」までの 4 件法で回答を求めた。

結 果

不登校傾向について「全くない」以外の回答した者の人数は 97 名（90.7%），退学希望については 35 名（32.7%）であ

り，以下，「全くない」以外の回答をした者のみを分析の対象とした。

不登校傾向，退学希望理由の下位因子およびソーシャル・サポート，生活満足感との間の相関係数を求めたところ，不登校傾向の理由において，ソーシャル・サポートと日常生活満足感との間に有意な正の相関（ $r = .38, p < .001$ ），日常生活満足感と大学への不満との間に有意な負の相関（ $r = -.27, p < .01$ ）が見られた。さらに，一方，退学希望理由については，有意な相関は見られなかった。

考 察

本調査の結果から，勉学を含めた生活上の満足感を媒介として，ソーシャル・サポートが不登校傾向を引き起こす理由低減する可能性が明らかとなった。一方でソーシャル・サポートと不登校，退学理由とが無関係であることから，これまで不登校，退学の原因の一つと考えられてきた対人関係上の不適応が，不登校，退学を引き起こす直接的原因ではないことが再確認された。つまり，大学生の不登校傾向を予防する方略として，ソーシャル・サポートを促進する各種取り組みが効果的であることが示唆されたものの，他方，学生が大学生活において抱く不満を低減し，無気力を生む状況を改善する必要性が指摘されたことになる。

また本研究では，実際に不登校，退学となった学生ではなく，不登校傾向や退学希望といった意思を持った経験はありつつも，通常通り通学し講義を履修している学生のみを調査対象としている。それに関わらず，少なからぬ割合の学生が不登校傾向，退学希望という意思を持った経験を有しており，大学生の不登校，退学の予防が早急に取り組まれるべき課題であることが改めて明らかとなった。一方で，実際に不登校状態，あるいは退学となった原因や理由については，本研究では明らかとなっていない。今後は，最終的に不登校や退学を選択した学生を対象とし，その原因をより詳細に検討するとともに，具体的な解決，予防策を考案する上での基礎づくりがより一層求められる。

引用文献

- 福岡欣治（2007）. 大学新入生のソーシャル・サポートと心理的適応：自己充實的達成動機の媒介的影響 静岡文化芸術大学紀要，8，69-77.
- 池田満（2011）. サークル等活動への所属が大学生における学校（大学）適応に及ぼす影響：大学組織によるサークル活動促進を通じた不適応予防への示唆 第 14 回日本コミュニティ心理学会発表論文集 48-49.
- 牧野幸志（2001）. 大学生の不登校に関する基礎的研究（1）：大学生の不登校と胎芽期希望の理由の探索 高松大学紀要，36，79-91.
- 谷島弘仁（2005）. 大学生における大学への適応に関する検討 人間科学研究：文教大学人間科学部，27，19-27.